

総合教育科目を学ぶ意味—
「日本の企業」を担当してみても



経営学研究科・商学部 鈴木 洋太郎

専門科目と総合教育科目

学生の皆さんが履修する科目には、各学部で提供される「専門科目」と大学全体で提供される「全学共通科目」（「総合教育科目」など）があります。この『アンロゾ』という雑誌は、総合教育科目のガイドブックの役割があります。残念なことに、自分の所属する学部の専門科目とは分野が異なりましたが、総合教育科目については興味を持ってない学生が少なからずみられます。

興味を持ってないと知識は身につけませんし、知識が身につかないと興味はさらになくなります。この悪循環を断ち切ることは難しいですが、「総合教育科目を学ぶ意味」を知ってもらうことが良いと思います、この文章を書いておきます。

とはいえ、学ぶ意味は人それぞれ違いますので、うまく説明できているか自信はないのですが、よろしければ、科目履修の際の参考にしてください。

アンロゾ Un roseau

総合教育科目ガイドブック

No. 11

タイトル“Un roseau(アン ロゾ)”
—— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623 - 1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリユ・フェーブル・ドウ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、
考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、
その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

縦糸と横糸を

絡ませて学ぼう



理学研究科・理学部 市村 彰男

新入生の皆さんへ

新入生の皆さんは、入学してホッとしてこれからの4年間の大学生活をどのように意義深く送ろうかと期待されていることと思います。また、本学でどのように学んでいけばよいのかと少し不安な気持ちを持つておられる方もおられるでしょうし、具体的な目標をすでに持っている方もおられるでしょう。私は本学で39年間教育・研究に携わってきました。はなむけとは言いませんが、今まで経験してきたことを踏まえ、現在の混沌とした社会の中で、大学でどのように学べばよいかを書き綴ってみました。もちろん学び方に答えがあるはずもなく、また内容は理系の教育に偏るかもしれませんが、読んでもらえればうれしいです。

南部陽一郎先生直筆のお言葉

2年前の2008年度のノーベル物理学賞を受賞されました本学名誉教授の南部陽一郎先生が、受賞を

総合教育科目を学ぶ基本的な意味

皆さんは、 が学びたくて、 に 関する学部を選ばれたわけですので、それとは無関係な分野の科目に関心がなくても不思議ではありません。ただ、特定の専門分野の科目を学ぶだけでなく様々な分野の科目を学ぶことが、幅広い視野や洞察力を身につけるために必要であると思われまます。また、1つの専門分野を掘り下げて探求する上で、幅広い視野や洞察力を身につけておくことが重要でしょう。こうしたことが総合教育科目を学ぶ基本的な意味といえそうです。

大阪市立大学は、大阪市内に立地し、商学部・経済学部・法学部・文学部・理学部・工学部・医学部・生活科学部といった多様な学部を有する「都市型総合大学」です。そのため、単科大学では学べない様々な分野の科目を学ぶことが可能です。

大阪市立大学で提供されている総合教育科目は、図表1のような分野を網羅しています。総合教育科目Aは「人間と環境」、「都市・大阪」、「生命と人間」といった都市型総合大学の特色を反映した分野から成り立っていますが、総合教育科目Bの中にも特色のある科目が多数あります。

図表1 総合教育科目の主な分野

総合教育科目A	人間と環境、生命と人間	都市・大阪
総合教育科目B	人間と社会、自然と人間	歴史と文化、情報と人間など

総合教育科目

「日本の企業」を担当してみよう

私は商学部の教員ですので、企業経営や経済社会に関わる学問分野が専門です。専門科目としては、「産業立地論」、「国際立地論」、「国際ビジネス概論」などを、総合教育科目

としては、「日本の企業」(総合教育科目B：人間と社会)などを担当しています。

「日本の企業」は、トヨタやパナソニックなど日本の企業を例に挙げながら、企業の経営戦略や企業と経済社会との関連などを説明する授業です。前回担当した際は、理学部や工学部など理系学部の学生の割合が3分の2以上を占めていました。

履修した学生の多くは企業経営についての授業を初めて受けるわけなので、担当者(私)の方も普段よりも緊張します。少しでも興味を持ってもらおうと、授業の「つまみ」の部分はできるだけ分かりやすく心がけたつもりです。ただ、授業内容に興味を持ってなかった学生もあり、企業経営に関心を持っていない学生に対して、もっと明確に私の授業を学ぶことの意味を伝えることが必要だったので、と反省しています。

企業経営に関する授業を学ぶことの意味

では、企業経営に関する授業を学ぶことの意味とは具体的に何でしょうか。

商学部や経済学部の学生の中には、企業そのものに関心があり、企業経営に関する知識を学ぶこと自体に興味を持てるかもしれませんが、理系学部の学生でも、将来、企業で活躍することを想像しながら企業経営に興味を持つてくれる方もいます。また、コンビニで買い物をしたりテーマパークで遊んだりといった日常生活とセブンイレブンやUSJといった企業とを結び付けることで企業経営に興味を持ってくれる方もいます。以上のように、企業経営に関する知識は、将来的に企業で働く上で役立つかもしれま

記念して「大阪市大のみなさん」と題して次の論語の有名な一文を直筆で書いて頂いています。「学而不思則罔 思而不学則殆」読んで思わざればすなわち罔(くら)く、思つて学ばざればすなわち殆(あやう)し。大学生生活を有意義に送るのにぴったりの言葉です。この直筆の色紙は、学術情報総合センター1階のロビーに置かれていますので、是非見てください。南部先生の学問に対する姿勢が伝わってくることを自覚していただけでは幸いです。

学んだことから自分で考える

この一文の前半の部分ですが、私たちが生まれてから中学生くらいまでは、新しい知識を得ると自分なりに咀嚼して考え理解し、次の新しいステップへと進むという過程を、自然と実践して来たのではないかと思います。幼いころ親や先生やあるいは友達に「なんで」とよく聞いていたでしょう?。ところが今では学年が上がるにつれて、とくに高校生になると受験勉強という名のもとで、覚えることに集中させられてきたのではないのでしょうか。高校の先生のそんな本読んでいる暇があったら単語の一つでも覚えよ、というような考えの風潮は困ります。私も今まで多くの大学受験の試験問題を作ってきましたが、たとえペーパーテストでも、単に知っているだけで解け、知らなかったらお手上げという問題ではなく、できるだけ考えさせる問題を作る努力をしてみました。しかし、ある程度新規な会心作だと思ってもいざそれが出題されると、その後はその問題自体が記憶問題になり下がってしまったという、大学受験の悪巡りに残念ながら陥っ

てしまいます。受験勉強から解放された今、是非「学而不思則罔 思而不学則殆」を実践されるようお願いいたします。

南部先生の市大での研究

南部先生の話に戻りますが、昨年11月に本学を訪問され、学長室で理学研究科の大学院生との懇談の場をもつていただきました。南部先生は1949年9月から1956年8月まで理学部および工学部の前身である理工学部在職され、20歳代で理論物理学研究室を主宰されました。懇談の場で、大学院生からの質問の研究を進めていく上で、アドバイスに答える形でその当時の思い出を踏まえ、自分が面白いと思つた新しい未知の研究に忍耐強く取り組んでいけばよいとの言葉を頂きました。南部先生の研究の多くは常にその当時の研究の一步も二歩も先に進まれたもので、その当時理解が困難な研究論文が少なからずあったの思いますが、他の研究者からの声が多く寄せられています。南部先生は現在も「ほがらかな探求」を実践されていて、研究でもがいている凡人の私にはただただ憧れるばかりです。

本当に理解できるよう辛抱強く学ぶ

新入生の皆さんも既に、学部・学科に配属されているわけですが、1、2年生のうちにはそれほど専門科目の授業は多くないでしょう。それが4年生になれば一端の専門家となり、さらに理系学部では大学院博士課程へ進学する学生も多く、研究室という場で先生や先輩にしこかれ、上の学年に行くとつれさらに専門性の高い研究者とみなされていきます。4年生では授業はほとん

せんし、買い物やレジャーなどの日常生活を有意義に過ごすために役立つかもしれません。少なくとも、自分自身で経済社会の課題や動向を考えるために、企業経営に関する知識は役立つものであると思います。

企業経営とキャリア・デザイン

ところで、企業経営（とくに企業の経営戦略）においては、企業自身の強みと弱みを把握すること、企業を取り巻くビジネス環境上の利点と問題点を把握することが不可欠です。そのための手法として、「SWOT分析」というものがあります（図表2を参照）。

以上のような現状分析を行った上で、自らの強みを活かし、あるいは弱みを克服することで、ビジネス環境上の利点をうまく利用するプランや、あるいはビジネス環境上の問題点を回避するプランを検討することになります。

こうした企業経営に関する知識は、人生をより良く生きていくための「キャリア・デザイン」の能力を向上する上で役立つかもしれません。自分自身の就職や進学などの場面において、自分の強み・弱みや自分を取り巻く環境上の利点・問題点を考えてみると、自分自身の人生を切り開くヒントが見つかる場合もあるでしょう。

敵（自分を取り巻く環境）を知り、おのれ

図表2 SWOT分析

	長所	短所
企業自身	S(企業自身の強み) = 技術を有しているなど	W(企業自身の弱み) = 面での能力の不足など
企業を取り巻く ビジネス環境	O(ビジネス環境上の利点) = 分野の市場が有望など	T(ビジネス環境上の問題点) = が不利になってきたなど

（自分自身）を知ることや、その際に長所と短所を明確にすることは、企業経営とともにキャリア・デザインにおいても重要であると思います。

思考方法を身につける

企業経営に関する知識には、実際の企業経営は であるという知識と、より理論的な「思考方法」（手法、考え方、分析の切り口）についての知識がありますが、学ばべき知識としては、後者の方が重要であると思います。なぜなら、実際の企業経営についての知識の多くは、時代とも古くならずに使えなくなりますが、SWOT分析のような思考方法は応用力のある知識として廃れないからです。もちろん授業では、学生に興味をもつてもらったために、実際の企業経営を例にしながら説明するのですが、身につけてもらいたいのは思考方法についての知識です。

「日本の企業」を学ぶ意味については、結論的にいえば、自分自身で経済社会の課題や動向を考えるために（より広い意味では、人生をより良く生きていくために）、企業経営に関する知識（とくに思考方法）を修得してもらったことにあると思います。

知識創造の場としての大学

専門分野以外の科目に興味を持ってもらうためには、学生に対して、もっと明確に総合教育科目を学ぶ意味を伝えることが必要ではないかと考え、「日本の企業」を例に挙げて、学ぶ意味について述べてみました。この科目を学ぶと の面に役立つのでは、といった具体的な意味づけを論じたいわけです。もちろん、総合教育科目を学ぶ基



どなく、ゼミや卒業研究に明け暮れることになりませんが、このときなんとなく解ったあるいはこのくらいの実験結果でいいだろうとの中途半端な気持ちで取り組むと、いつまでたっても小数点以下切り捨ての状態が数字が増えなくなり、後で大変なことになると思います。完全とは言いませんが、自分が取り組んだ分はしっかりと理解できるように辛抱強く行ってください。まずは整数の1を目指し、それを積み上げてください。このとき本当に理解しているかどうかを判断するには、独りよがりの理解にならないた

めにも、同僚、先輩、先生など他の人に取り組んだ内容を途中経過でもよいですから話をし議論することを勧めます。話をすることがきっかけで、一挙に1以上の数値の増加が見込まれることがあります。幸いなことに本学は、学生数に対する先生の数の比が他大学に比べて大きいという特徴がありますし、ほとんどの先生方が研究者として一流の存在です。しかも大阪という土地柄かもしれませんが、気さくな先生が多いので、遠慮せずどんな質問をしたり議論を吹っ掛けたりしてください。議論が長時間に及ぶこともままあるでしょうが、その間にはお茶やアルコールを御馳走していただけること受け合いです。もし大阪市立大学に象牙の塔のような威厳のあるものを望んでおられるなら、それは全くの期待外れとなりますので、あしからず。

縦系と横系の学び

学士課程の卒業時には、何を学んだか、どのように学んだかを問われます。上に述べてきたように、本学では上学年にいくほど優

れた専門性と、実践性に富んだ教育・研究プログラムが整備されていますので、深い学問の領域に入り込むのも困難ではありません。その時には深く掘り進んで新しい領域を見つけて下さい。本学の学術情報総合センターの図書部門には多くの研究者向けの海外で出版された新刊の本や双書を含め専門書が揃っていますので、是非活用してください。このように高度な専門性を追求する学びを縦系の学びと考えると、横系の学びは他の専門分野に広がる学びになるでしょう。

まずは横系1本から学びのすそ野を広げよう

私自身は、本当は専門バカになりたいのですが、現代の世の中はそのようなことをなかなか許してもらえません。君たちが学部や前期博士課程（修士課程）で卒業し企業に就職するとなると、専門的な知識だけでなく総合的な判断力を問われます。初めから多くの縦系と横系を織りなし、立派な織物に仕上げるとういうは無茶な話だと思われまますので、まずは横系1本でも広げるようにするのがよいでしょう。最近よく使われる言葉ですが、一つの専門領域だけに長けている人物をE（アイ）型人間といい、それをもとにすそ野を広げた人物をT（ティ）型人間といいます。これにさらに別の専門領域を絡めることができたら人物は（パイ）型人間となります。まずはT型人間を目指して学んでいってほしいです。実際にはIに横棒を重ねると、安定感に欠けこけてしましそうです。逆さTの（ジョウ）という漢字の方が安定感があって安心です。つまりすそ野の上に専門があるという構図です。

本的な意味は、前述しましたように、幅広い視野や洞察力を身につけるために様々な学問分野の知識に出会うことにあります。

私は、教員が学生に知識を一方的に伝えるだけではなく、教員と学生との「コミュニケーション」を通じて知識を創造することが大学の役割であると思います。また、こうした知識創造は、大学院だけでなく学部においても可能だと思います。学生の皆さんも、知識創造の場としての大学の構成メンバーなのです。

様々な学問分野との遭遇も、知識創造のきっかけになる場合があります。総合教育科目を履修する際、知識創造の場にいることを意識してみてください。これまで無縁だった学問分野との遭遇のなかで、自分自身の新たな可能性が開花するかもしれません。

暗黙知の修得にチャレンジしよう！

知識には、言語などに容易に表現できる「形式知」とともに、こうした形式化が難しい「暗黙知」があるといわれていますが、知識創造においては、暗黙知がとくに重要です。教科書に書かれている内容は、形式知といえます。こうした形式知をただ記憶するのではなく、それを批判的に検討（クリティカル・シンキング）しながら、本当に自分のものにすることで、暗黙知として修得することが可能になります。

高校までの勉強は形式知の修得だったと思いますが、大学では暗黙知の修得にも、ぜひチャレンジしてください。暗黙知の修得を目指すようなレベルに達すると、その学問を探究すること自体に学ぶ意味を容易に見いだすことになるでしょう。また、こうした学生は、知識創造の場としての大学

の優れた構成メンバーともいえます。

お薦めの総合教育科目

ゼミ(ゼミナール)や実験のような演習型の授業では、共同研究など経験の共有により、暗黙知を暗黙知として修得することもでき大変有意義です。

1年生向けの演習型の総合教育科目として、「初年次セミナー」があります。担当教員によりテーマは異なりますが、自分自身で研究課題を設定・検討するための基礎的な思考方法を学ぶことができます。

商学部の教員が担当しております。「日本の企業・演習」や「現代の経営・演習」は、すべての学部・学年を対象とした、企業経営を研究テーマとしたゼミですが、ぜひ理系の学生に積極的に参加してもらいたいです。日本企業のさらなる発展のためにはMOT(技術経営)の能力をもった人材が必要とされており、理系の学生も企業経営を学んで欲しいからです。

「実験で知る自然の世界」は、文系の学生を対象に、身近なテーマの様々な自然科学実験を通して自然科学知識を学ぶことができます。大阪市立大学が誇る基礎教育実験棟の素晴らしい実験設備を利用でき、教員だけでなく実験職員の方も指導してくれます。

鈴木洋太郎(すずき ようたろう)

1960年生まれ

1990年、九州大学大学院経済学研究科、博士(経済学)

現在、経営学研究科・商学部教授

専攻分野/産業立地論(国際産業立地)

全学共通教育の担当科目/「日本の企業」、

「現代都市論」(分担)

初年次には基礎力を

本学には、かなり専門性の高い全学共通教育科目が設けられていて、それぞれの学部によって必要な単位数は異なりますが、4年間で修得することになります。私が所属する理学部では、実験自習を含む専門教育の関係で、実際には1、2年生の間に受けることが望まれます。理学部および工学部では、全学共通教育科目の中でとくに専門教育の橋渡しになる基礎教育科目が重要視されます。理学部ではほとんどの学生が1年次から学科に所属することになっていきますので学科固有の必須基礎教育科目が多くあります。そのため初年次で自分の所属学科の授業だけに熟を入れすぎると、I型人間に陥ってしまいなかなかTへの展開が困難なことになります。学科の専門教育はいやでも叩き込まれますので、1、2年次には基礎学力を充分養ってください。

太い横系の上に強い縦系を張る学び

これだけでは横系は短いものになってしまいます。魏志・王肅伝に「三餘」という詩があります。年の余りの冬、日の余りの夜、そして仕事ができない時間の余りの雨の日に読書をするという内容です。三餘を今の学生に当てはめると、期末の夏および春休み、土日のいずれか一日、そして講義のない時間ということになるでしょうか。教科書や専門書以外の本を読み、一人でゆっくり考える時間を是非持ってください。そうして太い横系の上に強い縦系を張ってください。着る服ですと、私は黒色系統がすきだからそれしか着ないというのも个性的でよいで

しょうが、今後の世界を担っている君たちには、縦系と横系の織りなす、しっかりとえ抜いたデザインのもとでの学びの織物を作り上げていくことを期待します。

市村彰男(いちむらあきお)

1947年生まれ

1971年大阪市立大学大学院理学研究科修士課程修了、理学博士

現在、理学研究科物質分子系専攻教授、理学研究科・理学部長

専攻分野/分析化学

担当科目/基礎分析化学、基礎化学実験1(分担)

《編集後記》

本学の教育広報誌「大学教育だより」と全学共通教育総合教育ガイドブック「アンロソ」を内容の一層の充実化と幅広い頒布を目指して合冊発行するようになって、すでに4回目となりました。

『だより』のVoiceのコーナーでは、部局の枠を超えた学生・院生の学びの様子を紹介する企画として、経済学部3名が創造都市研究科の大学院生5名に訪問インタビューに行ってくれた様子を記事にしています。参加者にとっても普段の学びの様子を互いに知ると共に自分の学びを振り返る機会となればとの思いで企画しましたが、院生の方々のたくさんの貴重なアドバイスを、学生の皆さんもその後の学習に活かしてくれたようです。また、各部局における最近の教育の取組についてのコーナーでは、2つのセンターと商学部・経営学研究科を紹介して下さいました。その他に号は、大学教育を考える授業の一環で届けられた学生達の手紙に対する副学長からの返信も掲載しました。

『アンロソ』では、文系学部・理学部からそれぞれお一人ずつの先生が、新入生を初めとする学生の皆さんに、学びの道標となる語りかけをして下さっています。是非ゆっくり読んでみて下さい。大学教育研究センター